

鷗外晩年の境地「知足」についての一考察：「蛇」 「高瀬舟」「委蛇録」を中心として

天野，愛子
九州大学大学院比較社会文化学府修士課程二年

<https://doi.org/10.15017/11038>

出版情報：九大日文. 11, pp.36-41, 2008-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

鷗外晩年の境地 「知足」についての一考察

——「蛇」「高瀬舟」「委蛇録」を中心として——

天野 愛子

一 本論考の目的

漱石晩年の境地「則天去私」と並称される鷗外晩年の境地に「知足」がある。『老子』の第三十三章に「知足者富」とあるように、現状を満ち足りたものと理解して不満を持たないというのが「知足」の意味するところである。これは「道を体する者の徳を論じている」「弁徳第三十三」の章にある文言で、「弁徳」とは「徳を弁明する」意味で、「章旨」にかなっていると思われる。鷗外も人の道として「知足」を徳目のひとつに数えたのではないだろうか。もちろん、鷗外が首尾一貫して「知足」の重要性を唱えていたはずはない。青年期の鷗外は国家や自己に対し「知足」どころか「不足」の精神をもって貪欲に学び吸収して他を圧倒した感がある。鷗外の「知足」を論じるにあたって重要なのは、鷗外が「知足」の重要性を認識した時期を考慮に入れることであろう。したがって本稿では「高瀬舟」（中央公論 大五・一）によって鷗外のいう「知足」の内実を確認し、

続いて晩年の記録である「委蛇録」（大七・一・一―同十一・七・五）の命名意図を考えることで、鷗外が目指した生き方を探ってみたい。また「蛇」（中央公論 明四十四・一）については「知足」をキーワードとすることで、「半日」（スバル）明四十二・三）の書き直しと評される従来の位置づけとは別の文学史上の位置を提示できるのではないかと考えた。本稿は「蛇」「高瀬舟」「委蛇録」の三テクストに「知足」という縦糸を通し、「蛇」の解釈の可能性を広げる試みである。

二 「知足」と「高瀬舟」

「知足」の世界観は、「高瀬舟」に描かれているというのは衆目の一致するところであろう。なぜなら、「高瀬舟縁起」（心の花 大五・一）を見れば、鷗外は池辺義象校訂『翁草』（五車桜書店、明三十八・十一―同三十九・五）を読み、「その中に二つの大きい問題が含まれていると思った」と記しているからである。ひとつは「知足」の、もうひとつは「ユウタナジイ」の問題であるが、本稿では「知足」に焦点を絞って論じていきたい。鷗外は「高瀬舟縁起」の中で以下のように述べている。

一つは財産と云うものの観念である。銭を持ったことのない人の銭を持った喜は、銭の多少には関せない。人の欲には限がないから、銭を持って見ると、いくらあればよいという限界は見出されないのである。二百文を財産として喜

んだのが面白い。

これを読むと、「高瀬舟」執筆動機の一つは、「知足」の精神を下敷きとして、「財産と云うものの観念」を捉え直す「面白」さにあつたことが分かる。かつて鷗外と金銭をめぐる事情には複雑なものがあつた。森家の次女、小堀杏奴が著した『晩年の父』（引用は岩波文庫、昭五十六・九）に拠れば、「父が贅沢をしたと言えばこの葉巻ぐらいのものである。長い間吸つて小さくなつた葉巻が、書齋の机の上の貝殻で出来た灰皿の上に、まだ吸口がちよつと濡れたまま置かれてあるのをよく見た」とある。葉巻以外は儉約一筋に生き、大家族（祖母清子・母峰子・妻志げ・長男於菟・長女茉莉・次女杏奴・次男類）を養つた。一方、志げ（明十三・五・三、昭十一・四・十八）は、大審院判事を務めた荒木博臣を父に持ち、社交場の様を呈する広い座敷で女中に混じつて縫い物をしながら、仕立物の衣類の下に小説本を忍ばせ、時折読むのを楽しみにしていたらしい。結婚前から鷗外の小説を好んで読む文学少女で、「学習院の女学部に通学し、様々の稽古事で日を暮らしていた」お嬢さんであつた。小倉での幸福な新婚生活から一転、東京へ帰つてからのしげは不幸だつたという。小倉では「東京へ帰つたら親きようだとい別居して、二人きりの生活をしよう」といつていた鷗外は、その約束を反故にし、峰子に絶対服従の姿勢を貫く。鷗外の月給は袋のまま峰子の手に渡された。この結婚生活の齟齬は「半日」に詳しいが、姑との不和が原因で夫婦別居の生活へ入つた志げは「荒木家に長年

使われている辻という爺やが、毎月千駄木の祖母の許に出掛け、ては卅五円ずつ母たちの生活費を貰つて来る」という不自由な暮らしを強いられた。時を経て大正五年三月二十八日、峰子が他界すると同時に、鷗外は一切の家計を志げの手に委ねる。「それから父の死ぬまでの四、五年の間が、母にとつて家庭らしい味わいを持った幸福な日が続いたのではないか」（前掲『晩年の父』）と杏奴は回想する。月給袋の端と端を母と妻が両端から引つ張り合うような家族模様は直面し、鷗外は金銭問題の醜さと怖さを痛感したことだろう。

従来「高瀬舟」は、京都の高瀬川を上下する高瀬舟に乗り合わせた島送りの罪人である喜助と、護送役人で同心の羽田庄兵衛の問答を通じ、金銭という物理的なものから「知足」の観念を捉えていく物語として読まれてきた。庄兵衛の思索の始まりは、弟殺しの罪で遠島を言い渡された喜助の動作・表情に疑問を抱くところにある。

夜舟で寝ることは、罪人にも許されているのに、喜助は横になろうともせず、雲の濃淡に従つて、光の増したり減じたりする月を仰いで、黙っている。その額は晴やかで目には微かながやきがある。

庄兵衛はまともには見ていぬが、始終喜助の顔から目を離さずにいる。そして不思議だ、不思議だと、心の内で繰り返している。それは喜助の顔が縦から見ても、横から見ても、いかにも楽しそうで、もし役人に対する気兼ねがな

かったなら、口笛を吹きはじめるとか、鼻歌を歌い出すとかしそうに思われたからである。

庄兵衛はこの様子を不思議に思い、喜助から話を聞くことにする。喜助の話から庄兵衛が分かったことは、喜助が小さい時に両親が時疫で亡くなり、以来弟と二人でその日暮らしの生活を送ってきたが、その弟を安楽死させたことにより殺しの罪で牢に入り、遠島になったということである。その結果として、喜助はこれまでの生活と違い、食べることの心配がなくなつた上、牢を出る時に二百文もらえ、生まれて初めての蓄えを持たたことに十分な満足を得ている。罪人となつても尚みずからの境遇を受け容れ、感謝する心を忘れない喜助の頭から、庄兵衛は「毫光がさすように思」うという記述は、仏教の知足天を連想させ、喜助の神々しさを際立たせる。鷗外は、「人はどこまで往つて踏み止まることが出来るものやら分からない。それを今日の前で踏み止まつて見せてくれるのがこの喜助だと、庄兵衛は気が附いた」と記し、庄兵衛の視点から「足ることを知っている」喜助を説明している。山崎一穎は「森鷗外『高瀬舟』〈精神の痛み〉を共生する兄弟の物語」(月刊国語教育 昭五十九・九)で、「鷗外は『高瀬舟』で一体何を描いたのか」と問い、「弟と(肉体の痛み)を共有し、(精神の痛み)を共生して生きる喜助の精神に、広大無辺な原高貴性を見ていることは疑いない。それは喜助の(知足の精神)として結実している」との答えを提出している。「高瀬舟」では、視覚的な状態だけでなく、精

神的に安定した状態を述べた、従容自得の価値観が「知足」の観念として描かれている。

三 「委蛇録」命名について

晩年の鷗外は、医務局長を辞任(大五・四・十三)した後、つかの間の隠棲を経て、帝室博物館総長兼図書頭(大六・十二・二十五)、帝国美術院初代院長(大八・九・八)、臨時国語調査会会長(大十・六・十五)に就任、公務に忙殺された。この時期の鷗外は、桂湖村(明元・十・十六―昭十三・四・三)に意見を求めつつ、頻繁に「大正詩文」に漢詩を載せている。桂湖村は、『漢籍解題』(明治書院、明三十八・八)の著者として名高い漢学者で、鷗外の漢詩の師であり、遺族の希望で法名「貞献院殿文穆思齐大居士」⁽²⁾の名付け親になるほど森家の人々に信頼されていた。

当時の漢詩に対するこだわりは最後の日記である「委蛇録」からも窺えるわけで、その特徴である漢文体を用いた記述方法は、すでに大正六年一月に始まつている。「委蛇録」の名が与えられたのは大正七年一月一日からで、大正十一年七月五日の死去直前まで書き綴られている⁽³⁾。「委蛇」の二字が『詩経』に由来することは、すでに村岡功の指摘するところである⁽⁴⁾が、鷗外はどのような思いで日記にこの題をつけたのだろうか。東京大学総合図書館に所蔵されている鷗外文庫『詩経二〇卷附詩譜一卷』(前川六左衛門他版、延享四・九)には、返り点等の書き込みをしつつ熱心に読んだ跡が確認できる。鷗外は、「退食自公、

委蛇委蛇」の一文に付された鄭箋⁶⁾「退食謂減勝也、自從也、從於公、謂正直順於事也、委蛇、委曲自得之貌、節檢而順、心志定、故可自得也」にも朱を入れている。解すと、「委蛇」とは、窮屈に甘んじて自らの状態や境遇に満足して楽しむ様子と言うのであって、物事を程良く行い、気持ちと和らげること、心が安定し、それで自らの境遇に満足することができるのだという意味になる。これは知足常楽、すなわち足るを知られば常に楽しむという考え方に通じる。「知足」の人生観や処世術と同義である。帝室博物館総長就任から五日後の三十日、親友の賀古鶴所宛に、「老いぬれど馬に鞭うち千里をも走らむとおもう年立ちにけり」と書き送りながら『帝論考』(図書寮、大十・三三)や「元号考」の著述に打ち込み、博物館所収の膨大な資料の整理もこなすなど多忙を極めた晩年に、せめて心だけでも安寧に思ったのではないだろうか。鷗外は、落ち着いてゆつたりとしたさま「委蛇」を日記の題に選んだのである。

四 「蛇」の可能性

「知足」の精神は、「高瀬舟」を始めとする大正期の鷗外文学を特徴づけるものであるが、その萌芽は既に「蛇」に見受けられる。数多くある鷗外文学の中で「蛇」だけを取り上げて「知足」の萌芽を認めようとするのは、その方法において強引な感は否めないかもしれないが、拙稿「森鷗外「蛇」論」(『九大日文九』平十九・三)で論じ切れなかったテーマ(「蛇」に文学史上の

位置を与えること)に、「知足」の観点を用いた考察を提示することで今回は「足る」としたい。

「蛇」は、明け易い夏の十時から十二時までの二時間、信州の由緒ある旧家(穂積家)で、「新しい女」を標榜し、精神に異常をきたした嫁「お豊」について、三人の男性が話しあうという一種の思想小説である。冒頭部分には次のような状況説明文が記されている。

向うに締め切つてある襖には、杜少陵の詩が骨々しい大字で書いてある。何か物音がするように思つて、襖の方を見ると、丁度竹の筒を台にした、薄暗いランプの附いている向うの処で、「和氣日融々」と書いてある、襖が開いて、古帷子に袴を穿いた、さっきの爺いさんが出て来た。

この「和氣日融々」と書いてある「襖」は小説中に二度出てくる。一度目は冒頭、二度目は穂積家の主人が登場する場面で、「さつき清吉爺いさんの出て来た、「和氣日融々」と書いてある襖が、またすうと開いた」と記されている。この「襖」が開くことで、穂積家の実情が段々と明かされていく。「和氣日融々」の「襖」は「杜少陵の詩が骨々しい大字で書いてある」と説明されるが、杜甫詩の中に同一の句は見あたらない。養老館で諳んじた杜甫詩を壮年期の多忙な執筆活動の中で書き損じたか、音を重視して造句を試みたか、様々な考察の可能性が残されているが、ここではそのひとつとして、鷗外文庫に含まれ

ている『佩文韻府』（潘氏海山櫻館）を用いた可能性を挙げてみたい。これは知識人が漢詩を作る際に使ったとされるもので、

「融」を引くと「冲融」の中に「端拱納諫諍 和氣日冲融」という杜甫詩が見られる。争いごとをせず、のんびりとのどかに生きよ、というこの「和氣日冲融」⁶⁾の教えは、不満を抱かず大らかに生きよ、という「知足」の境地と同じ意味合いを持つ。

穂積家は、自我を通そうとして発狂したお豊を抱えている点で「知足」とは真逆の環境にある。お豊は、恵まれているものごとを目を向けて豊かに生きることができなかつた人物として描かれており、だからこそ余計に、この名前が皮肉なインパクトをもって響いてくる。

穂積家の主人として、どうしたらいいか分からずもがき苦しむ「千足」は、「ちそく」と読めば「知足」と同音異義語になる。現状に目を向け、どっしりと構えていられれば、お豊の発狂も招かなかつたとするこの当主の後悔は、「知足」の観念の欠如から派生している。なるほど、千足は欲もなく、既に有るものに満足して生きようとしていたかもしれない。しかし千足は、清吉が「張合のない」と言うように、自己の内部に閉じ籠ることで平穩に暮らそうとしている。現状に満足すること、事勿れ主義をおして外の出来事から逃げることは違う。「主人の血走った目は、じいっと己の顔に注がれている。己はぞっとした」、「主人はじっと考え込んでいる」、「主人は somnambule のような歩き付きをして、跡から附いてきた」と説明されるように、千足には晴れ晴れとしたところがない。のどかさが感じ

られないところに、「知足」に成りきれなかつた「千足」の哀しさがある。

穂積家の内部に「知足」の観念とは逆の世界が描かれたことで、対照的に「知足」の重要性が浮き上がってくる。「蛇」は、「知足」の境地の必要性を「高瀬舟」に結実させるまでの、入り口に位置する可能性を秘めた作品である。

【注記】

1 新釈漢文大系『老子 莊子上』（阿部吉雄他著、明治書院、昭四十一・十一）にも「知足者富、強行者有志」とあり、「足ることを知る者は富者であると言えるし、つとめて道を行おうとする者は志ある者と言える」と訳されている。

2 新釈漢文大系『詩経 下』（石川忠久著、明治書院、平十二・七）に拠ると『詩経』の「大雅」に「思齊」篇があり、「思齊大任」という句がある。この「大任」は人名で、「思」は形容詞の接頭語、「思齊」は「斉齊」と同意、つつしむさまを表す。桂湖村は、粗衣粗食に甘んじて学問を終生の友とした鷗外の法号に相応しいとして戒名に「思齊」の字を入れたのだろう。

3 『鷗外全集 第三十五卷』（岩波書店、昭五十・一）には、大正六年六月三十日の前に「以下吉田増蔵氏代筆」と書かれてある。吉田増蔵（慶応二・十一・二十三―昭十六・十二・十九）は、福岡県京都郡出身で、病床の鷗外より「元号考」の後を託され、後に元号「昭和」の考案者となつた漢学者である。

4 村岡功「委蛇のころ」（森鷗外記念会通信 一〇九号）平七・一）は

「委蛇」と鷗外を結びつけた先行研究で、「伊沢蘭軒」（大阪毎日新聞）「東京日日新聞」大五・六―同六・九に見られる「知足」の観念を「明鏡止水」という視点から検討している。この論考は、「伊沢蘭軒」が「委蛇録」と執筆時期を同じくするという点で、この時期の鷗外の心境を知るには大変示唆的である。

また、村岡は、「委蛇」の読み方は泥鰌の意を含まない「イイ」だろうと考察している。しかし、『抱腹百話』（文学同志会、明四十三・九）に、たとえば「俄かに生やす口髯に、新任官と知られけり」といった役人を揶揄する「髯の歌」が見られるように、当時の役人は髯をはやしていたため、泥鰌とか鯨と呼ばれることがあったという。鷗外も「ゆつたり生きる」意味の「委蛇」とは別に、役人として生きざるを得なかった自分を自嘲気味に見つめて「委蛇」を日記の題に選んだ可能性もあるのではないか。漢詩大系『詩経上』（高田眞治著、集英社、昭四十一・二）によると、『詩経』本文の「退食自公、委蛇委蛇」は、「精励恪勤の官吏が、（中略）家に帰り夕べの膳に向かう従容閑雅の有様を詠じて」いると説

明され、官吏の安堵を歌った詩として解されてきたという。大正期における鷗外の実生活に照らすと、公人としての側面を見過ごすことはできない。鷗外の「委蛇録」は、あえて泥鰌の意を含ませ、「イダロク」と読むべきだろう。

5 後漢の鄭玄による注釈。歴代、詩経を読む際の参考とされ、詩経の本文同様に大切にされる。

6 この句の意味合いは、「和」「気」「日」「融」という他の語意と照合しても座りよい。以下、参考までに『大漢和辞典』の記述を引いておく。

【和気】おだやかな気分。やはらいだ心。

【日融】日々にやはらぎたのしむ。

【融融】和ぎ楽しむさま。

※ 本文の引用は、岩波書店版『鷗外全集』に拠る。ただし、ルビ等は省略し、適宜新仮名新漢字に改めた。

（九州大学大学院比較社会文化学府修士課程二年）